
蒼穹の竜騎士(ドラグナイト)

紗夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の竜騎士^{ドラグナイト}

【Nコード】

N6072Y

【作者名】

紗夢猫

【あらすじ】

農村生まれの平凡な少年は、ある日を境に大きな時代の流れへと巻き込まれていく。出会い、別れを繰り返し、その先に待つものは平穏か、それとも… 初投稿作品です。誤字、脱字等お見苦しい部分を多く含むかもしれませんが、なまあったかい目で見守ってくださいと嬉しいです。

プロローグ（前書き）

この作品はあくまで架空であり、作品中にある都市、人名等は一切現実とは関係無いのでそのコトを忘れずに。

プロローグ

静寂。

風で揺れる木の葉の音と、時折聞こえる虫の声以外は何も聞こえない。

自分の鼓動だけがやけに大きく聞こえてうるさく感じる。

普段ならなんとも思わないその音も、かすかな音しかしないこの森の中では、十分すぎる程大きな音に聞こえてくる。そう、感づかれるんじゃないかと心配になる程に。

この場所で待つて2刻程。じつと身を潜め続けるのもそろそろ限界かもしれない。

”ここにはいないか？移動するべきか…”

そう考えた矢先、森の奥からガサリ…と音が。

「ヴフツ…フツフツ…」

音がした方をみるとそこには、1リルム(1m80cm)程もあるうかという巨大な体躯を持った生き物がいた。

ボア…四本の脚で歩き、顔には半リム(45cm)程もある角を持ったその生き物は、この森の中では一際大きな体躯を持つ、この森の主と言ってもいい存在だった。

ボアは周囲を伺いながらゆっくりと目の前を横切り、この先にある水場へと歩いていく。

呼吸を抑え、ゆっくりと手にした弓に矢をつがえ、キリキリ…と限界まで引き絞っていく。このサイズでは、きつちりと急所となる首の付け根へと撃ち込まねば1撃では落とせない。ゆっくりと慎重に狙いを定め、その時を待つ。

ボアが目の前を通り過ぎた瞬間

ヴュンッ

風を切りながら飛んだ矢は、狙い通りに首筋に…

しかし、撃ち出す瞬間の殺気を捉えたのか、駆け出そうとしたボア。辛うじて外れず、後脚の付け根に刺さった矢の痛みに鳴き声をあげ、それでも倒れずにこちらを睨みつけてくる。

”チツ…それなら…ッ”

勢いよく茂みから飛び出た俺は、牽制に矢をもう一本放つと、腰からダガーを抜き放つ。

狙いは変わらず首筋。そこに刃を立てるべく、猛然と駆け出した。

プロローグ（後書き）

コツコツと更新して行こうと思います。
感想等お待ちしております。

平穩な日々

「くそ…重い…っ」

先程狩った獲物をなんとか背負いなんとかかかんとか村の入り口まで辿り着いた俺は、背負っていたボアの体を地面に置くと、その場でしゃがみ込む。

いくら血を抜いたとは言え、この大きさだ。しかも全身筋肉の塊と言ってもいい。並の大人より重いかもしれない。いや、重いだろ。それをここまで背負って歩いてきたのだ。少し休まないと何もできないかもしれない。

そんな事を考えていると、そこから村の住人が顔を出し始めた。「おうカイト、今日はまたえらくデカイ獲物を獲ってきたなあ！」そう言いながら、よくやったでもいいいたげに肩をポンポンと叩かれる。

「たまたま運がよかったただだよ。後で捌くから取りにきて」

「いつも悪いなあ。この村で狩りができるのは、もうお前しかないから」

「気にしないで。ベルクさんにはいつもお世話になってるし」

そう。この人にはとても世話になっている。父親を亡くしてから女手一つで育ててくれた母をずっと支えてくれていた、父親のような人だ。村の大人達が戦争にかりだされてからも、ずっとこの村を守り続けてくれている。

「悪いなあ。俺も、こんな体じゃなければ」

そういつて自分の左半身を見るベルク。

そう、なぜ大人達が戦争に行っているのに、彼だけがこの村にとどまっているのか。いや、『とどまれているのか』と言った方が正しいか。

彼は、隻腕だった。

身体中にいくつもの傷を負っている彼は、元冒険者だという彼は、自分が幼い頃に村の側で行き倒れていたらしい。それを村の皆が助け、介抱する事で、なんとか一命をとりとめたらしい。しかし、その事で片腕をなくした彼は、この村に留まり、村に恩を返すと言つて様々な事に手を貸してくれていた…らしい。

全ては村の人達に聞いた話だが。

そんな風に話をしていると、

村の奥から一人の少女が、両手にいっぱい道具を抱えながら走ってきた。

「兄さん！どこまで行つたのよ！帰りが遅いから心配…つて…またこんな大きな獲物を…」

「ただいま、リリース。道具持ってきてくれたんだな、ありがとう。」

「あ…うん。はい、コレ」

そう言つて解体道具を渡してきたのは、妹のリリース。

小言が多いのが難点だが、なかなか可愛い部類に入る女の子…だとおもう。見た目は。ただ、どうにも気が強く、村の男の子達には若干嫌われているような気さえする。

だから兄さんは…とか、いつもいつも…とか小言を言われながら、獲物を解体する俺。

…この子の旦那は大変だな…

とか他人事のように考えつつ、手際良く肉を切り出していく。

皮はなめして防具用に…このサイズなら皆に十分行き渡るかな…な…などと考えていると、

「聞いてるの兄さん!？」

「はい、はい、聞いてるよリリース。」

危ない、もう少しで拳が飛んでくる所だった。

あれは痛いんだ…

「だから、もう無茶はしないでよね！？んじゃ、私は先に家に帰ってご飯の支度してるからね？」

そう言っただけで来た道に戻っていくリース。

「はあ…と思わず溜息をついていると、

「相変わらずだな。愛されてるじゃないか」

ニヤニヤとしながらこつちを見てくる男。

「うるせえよトリス。ほら、お前の分」

ひょいっと肉を投げ渡すと、

「おお危ない！と言いつつそれを軽々と受け取るトリス。

「あぶねえなあ、貴重な肉を…」

「お前が余計な事言ってるからだ。さつさと持って帰って、妹に食わしてやれ。うちみたいに頑丈じゃ無いんだから」

そう。トリスには病弱な妹がいる。

トリスの所は両親共に亡くなっているから、トリスしか働くものはいないのだ。

へへっ、いつもありがとなっ！と、家へと帰っていく。

その後ろ姿を見ながら、あいつが妹もらってくれたらなあ…とか…

いかんいかん、なんか考えが親父化している。

気を取り直して解体を再開する俺だった。

平穩な日々（後書き）

ボアはイノシシのおっきいVrを考えてもどうとわかりやすいと思います

暴虐の果てに

その日俺は、溜まっていた皮や牙等を近場の街に売りに出ていた。牙や皮だけじゃなく、村で採れた野菜や果物なんかも一緒だ。週に1度、こうやって街に出て、売ったお金で消耗品を買い揃えて戻る。どうしても、採れたものだけじゃ生活はできないから。

売れ残りや買った消耗品を馬車に載せ村に帰っていると、街道の向こうから、旅人らしき人影が必死に走って向かって来ていた。

「どうしたんだい？そんなに急いで」

「と…盗賊が…」

「盗賊!？」

戦争が起こってから、街や村では男が駆り出される。

そうして駆り出された男手の無い場所に、軍からの脱走兵や敗残兵が盗賊となって押し寄せる。今迄は戦場も遠く離れていたから比較的 안전한場所だったのだが…

「お前も、早く逃げた方がいい。これだけ荷物を抱えていたら、きつと見逃しては「ダメだ!この先に、俺の村があるんだ!」…そこは…もうダメだろう…俺が盗賊を見かけたのは、1刻も前の話だ…きつと…」

唇を噛み締め、それでも諦めないと馬にムチをくれる。

「おじさんは街の人達にその事を伝えてくれ!俺はいく!」

脳裏にいろんな顔が浮かんでは消えていく。

リス…母さん…ベルク…トリス…

俺がいった所で何ができるかはわからない。それでも、見捨てる事はできなかった。

半刻ほど走らせると、ようやく村が見えてきた。しかし、村の至る所から煙が上がっている。

涙がこぼれそうになるのを必死で抑え馬車を走らせていると、村か

ら何人かの人影が走り出てきた。

あの人影は…

「リーリース!!!」

「…ッ!…お兄ちゃん!」

馬車を止め、話を聞こうとする…が、

「あつちにいるぞお!!!」

「く…ッ!皆はこの馬車で街にいけ!おれが食い止める!」

「無茶だ!一人でなんて…」トリス!妹達を死なせる気か!?!…
でも…」

馬車から飛び降り弓に矢をつがえる俺に、なお渋るトリス。

「大丈夫だ、少しの間脚を止めたらおれもすぐに逃げる。森の中にはいれば俺なら逃げられる!早く行け!」

そう言うと馬に問答無用でムチをくれ走り出させる。

もう猶予はない。

「カイト!絶対!絶対死ぬんじゃねえぞ!!!」

…わかってる…こんな所で俺は死ねない!死んでやるものか!

馬車を追おうとする盗賊に矢を放ち牽制しながら、

必死に脱出手段を考えるカイトだった。

過酷な現実 - 1

「うう……ぐ……っ……」

ここはどこだ…？

ガタゴトと揺れる振動が身体に響く。

何処かに移動しているのはわかるが、自分がいつ、どうやってこの場所に来たかがわからない。

身体を起こそうとした所で身体の至る所に激痛がはしった。

「うあああああっ！」

「ダメよ！まだ寝てなきゃ！！」

そう言っただけで誰かが俺の身体を抑える。

誰だ！？いや、ここはどこなんだ！？

意識が徐々に覚醒するに連れて激しい痛みと疑問が浮かんでくる。

俺は確か、村を襲う盗賊から妹達を守ろうと…っ！？

そっだ、妹は！？

盗賊はどうなった！！？

再び身体を起こそうとするが、身体を襲う激痛のせいで思うように動かせない。

「ああ……が……ううう……ぐううう……！」

誰か、誰かあの人達を呼んで来て！！

ぼやける意識の片隅でそんな声を聴きながら、カイトの意識は再び闇に閉ざされていった…。

「ふむ…意識を取り戻したか。なかなか頑丈な奴だ。」
道端にボロボロになって倒れているのを見た時は、もう死んでいるかと思っただが…なかなか悪運が強いらしい。

しかし…この小僧がアレをやったというのだろうか…？

あの時の事を思い出して彼…デイルケンは寒気を覚えた。

街道を西に進んでいた彼は、街道沿いに横たわる幾つもの死体を横目に黙々と馬車を進めていた。

「…盗賊か…」

戦場はもつと東。本来であればこんな場所に盗賊が現れる事は滅多にない筈だが、それでも絶対とは言いつれない。

事実、この周囲を取り締まっている騎士の連中に捕まりさえしなければ、戦場に近い場所よりも安全に獲物を捉える事ができるだろう。巻き添えを食う事もない。

だが、これだけの人数がそうそうやられるものなのだろうか？

戦える大人達は皆戦場へと駆り出されている。

残った老人や女子供では盗賊に勝てる筈もない。

だからこそ”自分達のような仕事”もこうやって、堂々と街道を進んでいけるようなものなのだから。

ポツポツと転がっていた死体も途切れ、そのまま街道を進んでいた彼は、その先に一人の少年が行き倒れているのが見えた。

全身をボロボロにして、至る所から血が流れ出している。片手には

弦の切れた弓、反対の手には無骨なダガーが握られていた。

「…盗賊…にしては若い…」

そう言えば、街道沿いの死体には何本か矢が刺さったものがあつたが……

「まさか…こんな子供が……？」

いや、あり得ない。いくら盗賊とはいえ、戦場に出たこともあるだろう大の大人が、こんな少年にそうやすやすとやられるだろうか…

だが、現状ではそれしか考えられない。

隊列を止め、その少年の様子をみようとして…万が一にも死んではいるだろうが…近寄ると、かすかにその少年が身じろぎをしたように見えた。

「…おい、こいつに手当をして、馬車に放り込んでおけ」

不思議そうにしている手下に指示を出し、再び馬車に乗って走り出す。

8割…いや、9割がた死んでしまうだろうが、
もしも生き残れたら、いい”商品”になるかもしれない。

そう思考する彼の顔には、この商売をしている人間特有の邪悪な笑みが浮かんでいた。

再び目を覚ましたカイトは、大人達に連れていかれ、彼らの長である人物の前で跪かされていた。手と脚は鎖で繋がれており、自由に身動きする事ができない。

「お前、名前は？」

「…盗賊に名乗る名前はない…」

間髪おかず出した答えに一瞬虚を突かれたのか、目の前の男が目を丸くし、次いで大笑いしはじめた。

「何がおかしい！？殺すなら早く殺せ！奴隷になどなる気はない！」

男はそれを聞いて、今度はとても…本当に意地悪な、嫌らしい笑みを浮かべてこちらを見た。

「残念だがそれはできないな」

「何故だ！？」

「それはな、俺がその、奴隷商人だからさ。」

過酷な現実 - 2

曰く

お前は街道沿いに倒れていた

それを拾い

手当をして

看病をしてやった

あのままならば確実に死んでいただろう

その命を救ってやったのだから、それをどうしようが俺の勝手だ

そのあまりの暴論に異議を唱えようとすると、抑えていた大人から殴られた。

お前はもう奴隷なのだ。

その身体に奴隷の証も刻んであると。

そう言って改めて見せられたのは、己の右手。

その甲には見慣れぬ刺青が刻んであった。

自分が気を失っている間に、自分が人である事を辞めさせられていた。

反論しようとするやと殴られた。

奴隷が勝手に口を開くな…と。

そして聞かされた。

今いるのは、俺の慣れ親しんだ場所ではなく、そこから10ラギオ（200km）も離れた、大陸の中央部にさしかかる場所だと。

これから俺達は、山を越え、100ラギオ（2000km）先にある大陸中央部の国、ウィラスの首都、オフィリスへ向かうのだと。

まさか自分が4日も気を失っていると思ってもいなかったカイトは、その日、もう、今迄の日常には帰れぬのだと、そう理解した。

そして、あての無い、未来の無い、旅が始まった。

傷が治る迄は馬車に乗って。

傷が治ってからは、外で歩かされた。

お前より高く売れる女を馬車に載せるのだと言われて。

たまに村や街に着くと、

奴隷の中の何人かが連れていかれたり、
人数が増えたりもした。

口減らしの為や、身寄りの無い子供が売られて来たんだそうだ。

逆に、買われていった者もいた。

俺の看病をしてくれていた女の子も売られていった。

地方の領主の慰み者になるんだ…と、誰かが言っていた。

そうやって売られていくものは多かった。

男でも、その手の類で売られていく事も何度かあったようだ。

大抵は、力仕事をする為に売られていったようだが…

そうやって、周囲の人間が入れ替わっていくうちに、希望や、そもそもの思考能力すら奪われていったような気がする。

延々と歩かされ、

少し仲良くなつた人間も売られていき、

たまに野宿をする事になった日などは、
奴隷の中から何人かの女の子が連れていかれ、相手をさせられていた時もあった。

見た目がいいモノは手を出さずに高値で売るが、そうで無いモノはどうせ娼館に売られる。それなら俺たちが教え込んでやる…そう下卑た笑い声を聞いた事もあった。

最初の頃は、

妹や、トリス、ベルク等、村の人達の事を考える事もあった。

同じ奴隷の事を庇ったりする事もあった。

しかし、時が経つに連れ、何度も同じ事が起こるに連れ、感情が麻痺していったのだろうか、なにも思う事がなくなっていた。

ただひたすら、自分はどこにつくのだろうと

自分を買う人間はどこにいるのかと

いつ、この歩くだけの日々が終わるのだろうと

そう考えるだけになっていった

何処とも知れぬ地で

その日、何度目かの街に着いた日、
売られる為にと近くの川で身体を洗わされ、
連れていかれたのは、それまでにはあまり見た事がない、大きな屋敷だった。

何人も人間が働き、忙しく行き交うそこは、明らかに裕福な、そう、領主の住むような、そんな雰囲気のある場所だった。

お前からはなにも喋るなと言われ…すでに反抗する気もない…連れていかれた場所には、その屋敷の主であるらしき、風格のある男が待っていた。

「デイルケン、久しぶりだな。お前から訪ねてくる事があるとは」
「今回は、面白い商品があったからな」

若干嫌そうに…奴隷商人が直接来たからだろう…そういった男に、悪びれもなくそう言ったデイルケンはカイトに目を向けた。

「確かに見た目はそう悪くは無いようだが、別段力がありそうでもなし、特徴もなさそうだが？」

そう言った男にデイルケンは笑ながら、

「俺もパツと見は確かにそう感じるがな、これでなかなか、役に立つようだ。こいつを拾ったのはだいぶ東の農村の近くなんだがな、どうやらその農村を襲った盗賊を、結構な人数、弓とダガーで倒し

たらしい」

「…ほう…?」

値踏みするようにカイトを見るが、鼻で笑つと、

「そんな腕があるようには見えんがな…お前、名前は?」

「…カイト…」

「カイト…お前は、何が得意だ?」

と、問いかけて来た。

少し考えたカイトは、

「弓を少し…狩りができます…」

「ふむ…それだけか。で?この小僧をいくらで買えと?」

デイルケンはニヤリと笑うと言った。

「1エルム」

「バカな。たかが子供、それも狩りしかできない子供に1エルムとは…」

「しかし、それだけの価値はあると俺は見た。長年の、勘だ」
「……………」

それを聞いてじつところらを見て来る男。

なおも訝しげに見てくる男に、

「今は確かに弓しか使えないかも知れないだろうが、教え込めば使
い物になるかも知れんぞ?」

「しかし、1エルムはポリすぎだ。50レルム」

「80」

「…いいだろう。80エルム。ただし、使えなければ二度と貴様の所からは買わんからな」

そう告げた男にディルケンはニヤリと笑うと手を差し出した。

こうしてカイトの未来は、また別の人間の手に握られる事となった。

何処とも知れぬ地で（後書き）

1 エルム ≡ 10万

1 レルム ≡ 1000円

80 レルム ≡ 8万円

他の奴隷の平均が30レルム、力のある奴隷や普通の女が50、見た目のいい女が80、特に良いものが1〜1.5エルム

そう考えると、ディルケンはいぶ足元見えますね、はい。

新しい生活 - 1

「ついて来なさい」

そう言われ連れて来られた場所は、広大な敷地の端にある、大きな森の側に建っていた小屋だった。

意外にも綺麗な見た目の小屋に連れて来られ、何をするのかと戸惑っていたカイトに「入りなさい」と促され、自身もその小屋に入ろうと…扉を開けた、おそらくこの屋敷の使用人らしき人物は、中を見て、眉間に皺を寄せた。

何故動きを止めたか気になったカイトは、そつと脇から中を覗き込む…と…

…き…きたない…

思わず「…うつ…」とつめき声をだす程に、小屋の中は酷く…で済むのだろうか…散らかっていた。

足元には元が何かもわからぬ、辛うじて食べかけの食料か？と見られる“ナニカ”や、新しく何かを作っているのか？よく分からない部品などの欠片や塊、着古された衣服などが積み上がり、文字通り“脚の踏み場も”なかった。

他にも、何故ここにあるのか分からぬ鋏やら木の棒などが立ち並び、「倉庫か？」とも思いたくなる小屋で、いったい何をするのだろうか…と、チラリと件の使用人の様子を伺うと、眉間に深く…本当に深く皺を寄せ…

「片付けます。手伝いなさい。」

抑えきれぬ怒気を孕んだその声に、カイトは只、頷くしかなかった。

何をどうすればいいのかわからないカイトに、「アレはこっちに」「それはあつちに」等と支持を飛ばし、部屋を片付け続けていた使用人“フィリップ”は、やっと片付いてきた小屋内部を眺め、はあ…と溜息をついた。

ここに住む男は、いつ訪ねてもこんな風に部屋を散らかし、その度に自分が掃除をしていた。俺は掃除夫では無いのに…などと考えつつ、今日からこの屋敷に住む事になる奴隷…カイトといったか…を、横目でチラリと伺った。

主に呼び出され応接間に赴けば、例の“奴隷商人”が持つて来た奴隷を買ったと言われ、ここに連れて来て渡すように命じられた。別段奴隷を買う程困っている事があるわけでもなし、唐突に買う事になった奴隷を、どうせあの薄汚い商人にあれこれ言われ買わされたのだろう、そのどうにも平凡な少年を見て、ほんの少しだけ憐憫の表情を向け…しかしそれが仕事なのだと言い聞かせ、あれこれと支持を出す。

実際、使えない少年では無いようだ。

言った事には素直に返事をし、どうやら文字も少しは読めるらしい…先程本の整理をしていた…まあ、教え込めば使えるのだろう。し

かし、この小屋の主に果たしてそこ迄の期待ができるだろうか…と
考え、フィリップはまた少し頭が痛くなった。

新しい生活 - 2

小屋の掃除も一段落し、思わず溜息が出た所で、帰って来ない小屋の主に業を煮やしたのか、あの使用人が声をかけて来た。

「君、名前は？」

「カイト…といます」

それまで特に会話らしい会話をしていなかった為、虚を突かれたカイトは、少し緊張しながら返事をした。

「ふむ…私の名前はフィリップだ。この屋敷で、使用人として働いている。奴隷の管理も私が受け持っていた。君が来る迄はいなかったがな」

冗談を交え、ニヤリと笑いながらそう言った使用人…フィリップを見て、緊張しているのがわかったのか、気分をほぐそうとしてくれたのか、おかげでカイトはすこし気が楽になった。

「君は運がいい。この屋敷の主、アベル様は、とてもお優しい方だ。他の所と違い、君にも人としての生活はさせてくれるだろう」

優しく微笑みながらそう言われ、ほっと胸をなでおろしたのも束の間「だが…」と続けた彼の目に射竦められ、思わず息を呑む。

「だからと言って、怠けたりなどしたら、当然罰はある。いくら優しくとも、甘やかしはしないだろう。覚えておく様に」

身体に緊張を走らせ、かすれた声で返事をするのと同じ、小屋の扉

が開き、一人の男が入って来た。

「おうフィリップ！相変わらず真面目にやってそうだなあ！で？なんでうちでこんなガキをいじめてやがんだ？」

そう言っ入って来た男は、簡素なレザーアーマーを着込み、腰にショートソード、背中に弓を背負った、どう見ても冒険者か狩人しか見えなかった。

なんでこんな所に？などと思っていると、

「今日、旦那様を買われた奴隷を連れて来たんですよ。ここに連れて来る様にと言われたので。」

「ほー…見た目はひよろつちそうだが、使えるのか？」

「さあ…少なくともバカではなさそうですが…使えるかどうかはあなた次第でしょう」

それではこれで…と、小屋を出ていったフィリップを送り出したあと、冒険者のような人がこちらを振り向いた。

「とりあえず…メシだ！腹が減っちゃなんにもできやしねえ、お前も腹が減ってるだろう？こっちにこい！」

引きずられるように連れていかれたカイトは、少しだけ、明日からの生活が不安になっていた。

新しい生活 - 3

「で、お前は何かができるんだ？」

唐突に切り出され、言葉を失うカイト。食事をしている手も止まっていた。

狩ってきたのだろうか？ラビやホーン等の肉と、ライと呼ばれる植物の種子を煮込んだ物を差し出され、「こんな物しか無いが、好きなだけ食え」と言われたのは四半刻程前。

ここ数ヶ月とは比べられない程良い物を出され、戸惑っていたのも数瞬、鳴った腹の音に顔を赤くし、貪り様に食べていた結果、鍋の中はほぼからになっていた。

カイトの食べ様を面白そうに見やり、自身も負けじとかつくらっていたその男：ガゼットといったか：は、落ち着いた所を見計らい、そう切り出していた。

彼としては別段おかしな問いではなかっただろう。むしろ、当たり前
前の疑問でもある。

と、言っても、彼の所に連れてこられたからには、やる事はそうあるわけでもなく、その中の何をさせるかを考える為に聞いた迄だ。

だが、世間一般ではとてもおかしな事でもあった。

奴隷と言えば、言われた事に絶対服従、アレをしろ…と言われれば、有無を言わずやらされる。当人ができる、できないは関係無いのだ。

この人は、あまり奴隷を扱った事が無いのだろうか？

などと、奴隷歴数ヶ月のカイトがバカな事を考えつつ、「言われた事ならなんでも…」と、答えたのを聞き、ガゼットは少し困った様な顔をした。

「ん〜あ〜…お前は、ここで何をやるか聞いたか？」

黙って首を横にふるカイトを見て、嘆息するガゼット。「あのぼっちゃん…軽い説明くらいしとけよ…」と、一人愚痴ると、改めてカイトを見やった。

「よし、ならここでの仕事の説明から始めるか。俺はここで、森から出て来るモンスターの退治、それと肉類の食料の調達をしている。お前がここに来たのは、その補佐と言った所だろう。まあ、今迄俺一人でどうにでもなっていたから、人出が必要って訳でもないんだがな」

「モンスター…が、出るんですか？」

その言葉に、内心ヒヤリとさせられる。

モンスター…人を襲う怪異

と、言っても、全部が全部、人を襲う訳でも無い。

先程食べていたラビヤホーン、以前村で狩っていたボア等、草を食べて生きる比較的穏やかな物も多い。

人語を解する物もいる位だ。むしろそちらのほうが多い。

だが、問題は、その少数派になる、人を襲う物たちのほうだ。

人を襲う。それが出来る程の力を持ち、存在する物。それらを総じて“モンスター”と、人は呼んでいた。

つまり、この森には“人を襲うモンスターが出る”という事。

その事を理解し、緊張するカイトを見て、何故かニヤリと笑うガゼット

「成る程、確かに頭は働く様だ。だが、心配しなくていい。もう滅多な事じゃこの森からモンスターが出て来る事はない。基本は2日か3日おきに森に入って、獲物を狩ってくる。後は、裏手の畑の世話やら…後は、薪割り位か」

それを聞いて安心した。そうでないならば、四六時中モンスターの襲来に気をつけていなければいけない。休む間もなく警戒し続けるのは、死ねと言われるも同義だ。

いくら、奴隷になったからといって、簡単には死にたくない。

「だから…お前が何ができるか聞いたんだ。あしでまといは連れて行きたくないからな」

ほっとしていたカイトにそう告げるガゼット。若干ニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべている様な…

「弓と、ダガーを少し。でも、いいんですか？刃物持たせたりしちゃうまじいんじゃない？」

ちよつとムツとしたカイトが少し投げやりに答えると、なおも面白そうに笑うガゼット。

「お前位のカキが刃物持った所で、何も怖くはない。素手でも叩きのめせる」

さらにムツとしたカイトに、さらに追い討ちをかけるように

「それに、お前の右手の“ソレ”がある限り、ここから出たとしても、何も変わらんぞ」

…そう、奴隷になった事でつけられた、この右手の“奴隷の証”は、一生涯奴隷である事を刻む物。

本来首筋等に多くつけられるそれは、主人に解放の証である、別な刺青を彫られる迄、奴隷である事を示される。

もしここを自力で出た所で、別な人間にそれを見られ、捕まれば、また容赦なく奴隷である事を強いられる、魔の鎖。

その事を思い出させられ、俯くカイトに、少し言いすぎたとちよつと申し訳なさげなおそをしたガゼットだったが、気を取り直したようにまた説明を続けた。

「まあ、そうゆうことだ。ダガーは生憎持ち合わせがないから、代わりにショートソードを使え。俺の予備を貸してやる。弓もな。矢は自分で作れ。それから、これから薪割りはお前の仕事な」

狩りは今日はやって来たから、薪割りと、獲物をいくらか干し肉よ

うにしておいてくれ。

そう言い残し、後は任せたとこる寝をはじめたガゼットに、ほんとは大丈夫なんだろうか、この人は？と、どうにも釈然としない気持ちで、仕事を始める為に表に出るカイトだった。

それから、矢のように月日が過ぎて行った。

ガゼットの行ったとおり、モンスターが出る事はなく、数日置きに入る狩りでも、苦勞する事もなく獲物を獲っていった。

元々狩りをしていた事もあり、ガゼットの力量もあつてか、必要がない程獲ってしまった事もある。そんな時は全て干し肉にするか、街に使用人が売りに行っていたようだが。

畑の方も特に手がかかる事は無く、とつた野菜も自分達が食べるだけの物なので、特に気負いなどもなかった。苦勞したのは薪割り位だろうか。

だがそれも、2年を過ぎた今は、全く区も無く出来るようになり、毎日の様にやっていたせいか、体つきも一回り…いや、2回り程も大きくなっていた。

もう子供と言われる事もないだろう。

時折暇を見ては稽古をつけてくれたガゼットのおかげで、シヨートソードの使い方も少しはマシになっていた。

そこらの野盜数人位なら、苦もなく圧倒出来る程に。

弓の方もだいぶ腕が上がり、空を飛ぶ鳥も射落とせる様になってい
た。

これは、もともと不器用だったのだろうか？ガゼットよりも腕が上
がり、彼を苦笑いさせていた。「俺は必要ないんじゃないか？」と
いう冗談とともに、毎度の如くサボろうとする言い訳に使う様にな
っていたが…。

しかし、新たな日常になっていたそれらは、とある一人の人物によ
って、粉々に打ち砕かれる事となる。

とある、一人の“お姫様”によって…

新しい生活・3 (後書き)

まだまだ書く文章量がわからず、部の長さが短くなっていますが、徐々に量をあげていけたらな…などと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072y/>

蒼穹の竜騎士(ドラグナイト)

2011年11月21日19時29分発行